



のと海洋ふれあいセンターだより

の と かい ちゅう りん
能 登 の 海 中 林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No. 20. Mar. 2004



磯の観察路に漂着したエチゼンクラゲ(8頁参照)

< 目次 >

日本のイスズミ属魚類	坂井 恵一...2
冬に干出する海藻類	田島 迪生...6
トピックス	7
センター誌抄と観察路だより	8

平成16年3月

日本のイスズミ属魚類

坂井 恵一

研究のきっかけ

今から約20年前、私はのとじま臨海公園水族館の飼育係として勤務してました。この水族館は、当時としては日本における大規模な水族館の一つで、屋外には直径20m、水深4m、水量が約1,150トンの“トンネル水槽”を備え、能登で採集できる魚だけを飼育してました。

トンネル水槽で飼育する魚を集めるのも大変でした。大型水槽であるがゆえ、飼育する魚もそれに見合った大きさが必要です。このため、水族館から最も近い能登島の東側、富山湾に仕掛けられた鰻目大敷網（大型の定置網）等が主な魚の収集場所となっていました。

これらの収集活動を通して、能登の定置網では、季節によって獲れる魚の種類とその量が変化していることを知りました。もちろん、1年中獲れる魚でも、決まった季節になると漁獲量が多くなりました。そのうち私は「能登の沿岸にどれくらいの種類の魚が住み、どのように生活しているのか？そして季節によってなぜ捕れる魚の種類とその量が変化するのか？」という疑問を抱き、このなぞを解きたいと考えるようになりました。そこで昭和59（1984）年の秋、能登島町の鰻目に住居を移し、毎朝のように漁業組合の荷さばき場に通って魚の調査を始めました。当時、鰻目沿岸では約10ヶ所で定置網が仕掛けられていました。定置網では多種多様な魚が混じって獲れます。特に大敷網の場合、まず獲れた魚を船の生簀のなかで氷漬けにします。それをそのまま漁港の荷さばき場まで運び、そこで種類や大きさごとに魚を選別してました。その時、食用とされない魚は当然捨てられます。私は荷さばき場で魚の選別を手伝いながら、獲れた種類とその量をノートに記録し、捨てられた魚を標本として集めました。

イスズミ属魚類との出会い

調査を始めたその年の12月、何気なく見つけた

魚をイスズミだと思い込み、写真を撮って標本にしました。数日後、最初に見つけた種類とはそれぞれ違う特徴を持つ2種類のイスズミ属の魚が見つかりました。そこで、当時としては最新の図鑑でこれらを調べてみました。その図鑑には3種のイスズミ属の魚があり、和名と学名は次のようになっていました。

イスズミ：*Kyphosus lembus* (Cuvier)

テンジクイサキ：*K. cinerascens* (Forsskal)

ミナミイスズミ：*K. bigibbus* Lacepede

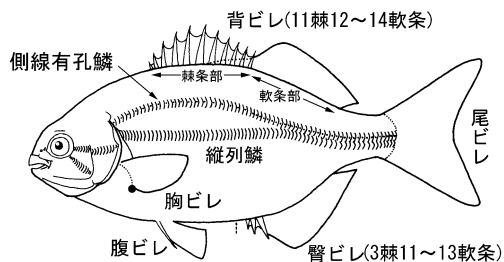
標本の特徴と図鑑の特徴を照らし合わせた結果、後で見つけた2種類はイスズミとテンジクイサキであることが分かりました。ところが、最初に見つけてイスズミだと思い込んでいた魚はどの種類にも一致しません。ミナミイスズミによく似ていましたが、鰓の骨の数（鰓把数）が約5本少ないのです。しかも、この正体不明の種類が集めたイスズミ類の標本の中では数的に最も多かったのです。

イスズミとテンジクイサキの2種は、日本でも古くから知られていた魚でした。一方、ミナミイスズミは小笠原諸島で見つかり、昭和51（1976）年に初めて和名と学名が学会に報告された種類でした。また、全身が黄色の個体も見つかったので、注目を集めました。発見が遅かった理由は第二次世界大戦後、小笠原諸島と沖縄の施政権がアメリカ合衆国に移され、昭和43（1968）年まで日本に返還されなかったからです。返還直後、東京水産大学（現東京海洋大学）が同諸島の魚類調査を行ない、この魚を見つけました。したがってミナミイスズミは、いわば日本における新顔のイスズミ属の魚だったのです。

イスズミ属魚類の特徴

イスズミ属魚類の形態の特徴は下図のとおりです。全身が鱗でおおわれ、背ビレと臀ビレの軟条部、尾ビレも小さな鱗でおおわれます。

両顎には先が尖った門歯が一行に並びます。体色は青みをおびた銀色、茶色、灰色等です。目立った斑紋はありませんが、目の下が銀色に輝き、体側には10本以上の鱗列に沿った縦線があります。また、胸ビレの下側付け根に小さな黒っぽい円斑があります。



門歯状の歯が並んでいるイスズミ属魚類の口

イスズミ属の魚は能登で“くろばんちょ”や“ちかい”と呼ばれているメジナに似ていますが、ミナミイスズミを除けば体色に目立った特徴のない、言わば地味な魚です。両顎の尖った歯で海藻類を剥ぎ取って食べる雑食性で、特有の臭いを持っています。能登では食用になっていません。このことが標本集めに幸いでした。鰺目ではイスズミ属の魚をすべて捨てていたのです。ただし、沖縄等では「この臭いが良い」と言う人も多く、重要な食用魚となっています。



沖縄県名護市の魚市場に並べられたイスズミ類

研究のスタート

昭和60年春、東京水産大学で開催された日本魚類学会の折、京都大学の中坊徹次先生に「イスズミの仲間でちょっと変わった種類がたくさん捕れるが、正確な名前が分からない」と相談いたしました。そして、その魚の特徴を詳しく伝えたとところ「もしかしたら新種かもしれないので標本の数を増やし、詳しく調べてみる必要があります」との回答をいただき、中坊先生との共同研究がスタートしました。その年の秋、同博士自身が能登を訪れ、私に標本管理の方法を指導してくださいました。その後、鰺目の漁業組合でイスズミ属魚類を徹底的に集めました。1個体ごとに番号を記した布札を付け、後でヒレの条数や長さを測りやすくするために各ヒレを広げてから固定液に漬けて標本にしました。また、各個体が採集された日と場所をノートに記録しました。時には集めた魚で、20リットルのバケツが一杯になったこともありました。その後、種類ごとに特徴を観察し、ヒレの条数や鱗の枚数、体の各部の長さの測定等を行いました。また中坊先生は文献調査のため、京都大学の図書館やご自分が収集された貴重な文献を複写し、私のところに届けてくださいました。これらは英語はもとより、フランス語、ドイツ語、オランダ語で書かれたものでした。

次は日本、そして世界各地のイスズミ属魚類の標本調査です。特に、新種として発表されたときに研究に使用されたタイプ標本の観察は欠かすことのできない調査であると、中坊先生から指導を受けました。このような標本は主に博物館で保管されています。中坊先生が自ら関係する博物館に連絡を取り、標本借用の手続きをしてくださいました。ところが、タイプ標本については、貸出しを拒否されるケースが少なくありませんでした。そのような場合、タイプ標本を所蔵する博物館を訪れ、その博物館内で調査をしなければなりません。昭和62(1987)年10月、新婚旅行でオーストラリアに渡航した際、シドニーの博物館で標本調査を行いました。その後も海外旅行を兼ねてヨーロッパやハワイ、オーストラリアの博物館を訪問し、タイプ標本等の調査を行いました。

その後の研究で、この正体不明のイスズミは明

らかにミナミスズミと異なる種類だと確信が持てました。そこで平成3(1991)年8月、この種類に新和名「ノトイスズミ」を提唱しました。ただし、学名は不明のままとし、ミナミスズミには *K. bigibbus* を適用しました。

世界共通の名前である学名を決定するにはタイプ標本の調査が欠かせません。ある種類とタイプ標本の特徴が一致するならば、その種類にタイプ標本と同じ学名を適用しなければなりません。この時点で、ノトイスズミは日本における新しいイスズミ属の種類だったのですが、どの学名を適用すれば良いのか、それとも新しい学名を付けても良いのか、その検討が残されていたからです。実はバリの博物館に保存されていた *K. bigibbus* のタイプ標本(MNHN B 2162)は体の右側だけの皮の乾燥標本で、ノトイスズミとミナミスズミを識別する最も重要な鰓は残っていませんでした。このタイプ標本に残っていた形質だけで、ノトイスズミとミナミスズミを見分ける特徴を探り出すことが必要だったのです。



K. bigibbus Lacepèdeのタイプ標本

平成7(1995)年、日本でイスズミの学名に適用されていた *K. lembus* は、それより約6年前に新種として発表されたのと同じ種類であることが判り、本種には *K. vaigiensis* (Quoy and Gaimard) を適用すべきであることを発表しました。その後、ミナミスズミは体長が20cmを超えると臀ビレの前方部軟条が伸長するが、ノトイスズミは伸長しないことが判り、この特徴でノトイスズミと *K. bigibbus* のタイプ標本が一致しました。そこで平成16(2004)年2月、ノトイスズミに *K. bigibbus* の学名を適用し、ミナミスズミは新種として学名 *K. pacificus* を提唱しました。種小名 *pacificus* は、本種が太平洋にだけ分布することに由来します。

日本産イスズミ属魚類の同定と特徴

日本のイスズミ属魚類は次の検索表で種類を識別することができます。なお、各ヒレの条数は代表値なので、1本程多かったり少なかったりすることがあります。

- 1a 背ビレは11棘14軟条、臀ビレが3棘13軟条
..... イスズミ
- 1b 背ビレは11棘12軟条、臀ビレが3棘11軟条..... 2
- 2a 体側の縦列鱗数は50~57。背ビレと臀ビレの前方部の軟条はよく伸長する テンジクイサキ
- 2b 体側の縦列鱗数は58~72..... 3
- 3a 鰓把数は26~29。体長が20cmを超えると臀ビレの前方部の軟条は伸長するが、背ビレの前方部の軟条は伸長しない..... ミナミスズミ
- 3b 鰓把数は21~24。背ビレと臀ビレの前方部の軟条は伸長しない..... ノトイスズミ
- 各種の特徴は次のとおりです。

イスズミ

Kyphosus vaigiensis (Quoy and Gaimard, 1825)

背ビレは11棘14軟条、臀ビレが3棘13軟条、胸ビレが19軟条。背ビレの棘条部の基底長は軟条部の基底長より短い。背ビレと臀ビレの前方部の軟条は伸長しない。側線有孔鱗数は51~55、縦列鱗数は56~64。鰓把数は29~34。体色は背側が青っぽく、腹側は白い。体側の縦線は青いか黄色。インド・太平洋海域の熱帯から温帯に広く分布する。



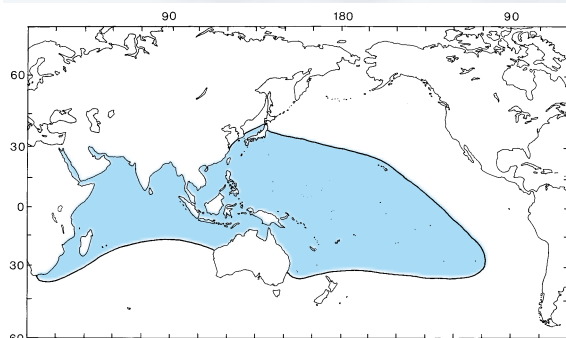
テンジクイサキ

Kyphosus cinerascens (Forsskal, 1775)

背ビレは11棘12条、臀ビレが3棘11軟条、胸ビレが18軟条。背ビレの棘条部の基底長は軟条部の基底長より長い。背ビレと臀ビレの前方部の軟条は良く伸長する。側線有孔鱗数は49~53、縦列鱗数は51~57。鰓把数は26~31。体色は全身

が青っぽい。イスズミとほぼ同様に、インド・太平洋海域の熱帯から温帯に広く分布する。

本種については、学名等の分類学的な問題が残っているので、現在、その論文を準備中です。



イスズミとテンジクイサキの分布概略図

ノトイスズミ

Kyphosus bigibbus Lacepede, 1801

背ビレは11棘12軟条、臀ビレが3棘11軟条、胸ビレが19軟条。背ビレの棘条部の基底長は軟条部の基底長より長い。背ビレと臀ビレの前方部の軟条は伸長しない。有孔側線鱗数は51～55、縦列鱗数は58～69（多くは60以上）、鰓耙数は21～24。体色は全身が茶色っぽい。インド・太平洋海域の亜熱帯から温帯に分布する。

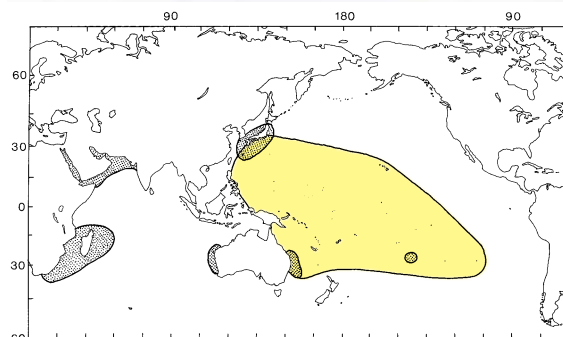


ミナミスズミ

Kyphosus pacificus Sakai and Nakabo, 2004

背ビレは11棘12軟条、臀ビレが3棘11軟条、胸ビレが19軟条。背ビレの棘条部の基底長は軟条部の基底長より長い。背ビレの前方部の軟条は伸

長しないが、体長20cmを超えると臀ビレの前方部軟条部が伸長する。有孔側線鱗数は52～56、縦列鱗数は62～72。鰓耙数は26～29。体色は灰色っぽい青色、小笠原諸島では全身、または体の一部が黄色または白色の個体が見つかる。太平洋海域の熱帯から亜熱帯に分布するが、インド洋には分布しない。本州沿岸にも稀に出現する。



ノトイスズミとミナミスズミの分布概略図

今後の課題

日本産イスズミ属魚類の分類学的研究はもう少しで解決できそうです。しかしながら世界に目を向けると、その研究はいまだ未解決なままです。また、この研究のきっかけとなった最初の疑問も手付かずのままなので、これらを今後の課題と考えています。

謝辞

イスズミ属魚類の研究を基礎から指導をさせていただきました京都大学総合博物館の中坊徹次教授に深謝いたします。標本の収集と海の魚に関するさまざまな知識を与えていただいた能登島鰻目の元鰻目漁業協同組合の平山重晴参事、梅屋定置網の梅田靖夫氏、加地昭一氏、忠貞貞次氏、その他の同漁業組合の関係者、また能登以外の標本の収集と所蔵標本の貸し出し、文献の収集に協力していただいた関係各位に感謝申し上げます。

（普及課長）

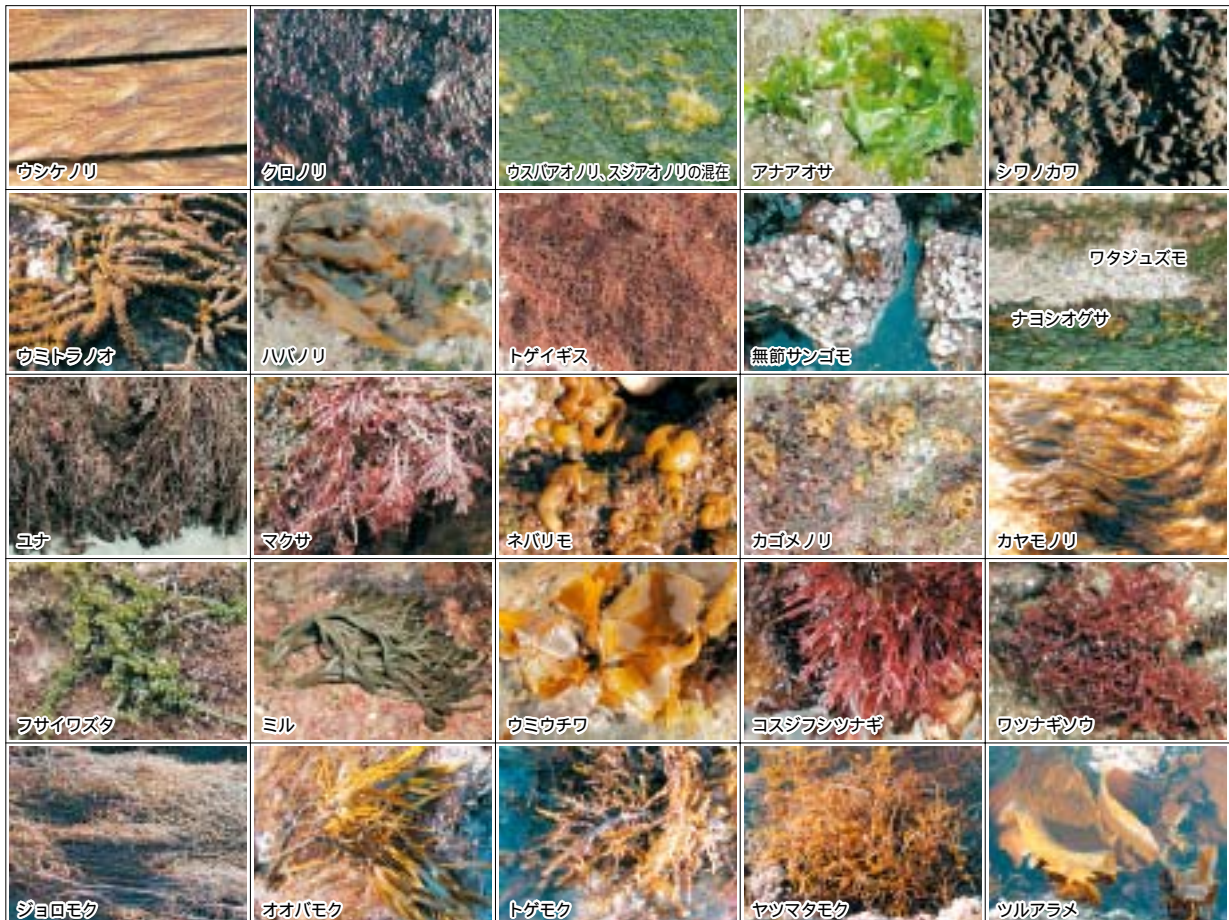
冬に干出する海藻類

田島 迪生

内浦町の潮位は夏に高く、冬に低く、年間約70cmの高低差があります。冬は多くの海藻が成長し繁茂する季節です。潮位が低いと海面から顔を出した磯の観察路を沢山の海藻が彩っています。海面より90cmも高いところに紅藻類のウシケノリと岩のりのクロノリがみられます。ウシケノリは岩のりと同じ場所に生えるので、のり製品化の際、混入し漁業者に嫌われています。緑藻のウスバアオノリとスジアオノリが水面上50cmまで生えています。それよりやや低い位置には緑藻ではアナアオサ、褐藻ではシワノカワ、ウミトラノオ、ハバノリ、紅藻ではトゲイギスの大群、枯死し白化した有節サンゴモが、それよりやや下にやはり白化状態の無節サンゴモ類がみられます。水面上40cmほどにワタジュズモが分布し、緑藻のナヨシオグサと明瞭に棲み分けしています。普通は潮間帯下部に分布するユナも水面上30cmまで

生育し、その5cmほど下にハイテングサ群落、少量のマクサやホンダワラ類のアカモクが生えています。それより5cmほど低くにはイソモクや褐藻のネバリモ、カゴメノリ、カヤモノリも見られます。

水面とほぼ同位置では緑藻のフサイワズタ、ミル、褐藻のウミウチワ、紅藻のコスジフシツナギ、ワツナギソウがあります。水面から顔だけ出しているホンダワラ類は変色し黒ずんだ色調が多く、ジョロモク、オオバモク、フシスジモク、フシイトモク、トゲモク、ヤツマタモク等で、褐藻のツルアラメと共に、いやいやながらの干出のようです。ツルアラメは深海に生育できる種で、世界で水深200mの記録が、また本県では水深40m近くで採集したことがあります。冬の海は大変寒いのですが、我慢し沿岸を歩いてみると新しい発見があります。一度、いかがでしょうか。(館長)



トピックス

ひぎしゃ
被疑者はアオサギとイタチ!?

東出 幸真

平成15年の春に完成した屋外タッチフィールド、5月ごろから釣りやタモ網で採集した磯の生きものを入れて飼育を始めました。

メジナにメバル、ホンベラ、クサフグなどの魚達、ヤドカリ類、イトマキヒトデとアカヒトデ、そしてアメフラシ等、危害を受けそうにない九十九湾周辺の代表的な生きものが中心です。その数は魚が約300、その他の動物が700、あわせて1,000点近くを収容しました。タッチフィールドはにぎやかになり、実際の磯観察には及ばないものの小さな子供達も安全に磯遊びができると好評で



した。

ところが8月下旬、生きもの数が少なくなっているのに気づきました。特に、魚はクサフグだけしか見つからなくなっていました。最初は子供達が捕まえて外の海に逃がしたのだろうと考えていたのですが、それにしても魚だけとは奇妙です。改めて考え直したところ、魚を主食としている鳥「アオサギ」を毎日のように近くで見かけるようになっていました。また、毎夕の散歩コースにされている方から「イタチがうろついている」との情報も寄せられました。アオサギとイタチが犯人だったようです。

タッチフィールドは深いところでも水深が約50cm、魚の隠れ場も少ないので彼らにとっては格好の餌場になったのかもしれませんが。結果として私たちは、せつせと彼らの餌を運んでいた「間抜けな人間」になっていたようです。現在、彼らとの知恵くらべが続いています。(普及課技師)

小型ハクジラの漂着

坂井 恵一

平成15年8月1日、「穴水町沖波の海岸にイルカらしきものが漂着しているので、種類を確かめるため同行していただきたい」との連絡を受けました。

連絡をくれたのは、石川県水産総合センター普及指導課の浜上専門員です。早々、必要な器材を手に現場に向かいました。第一発見者は同町沖波に住む樽 敏文さんで、前日の7月31日の夕方に気づいたそうです。かなり腐敗が進んでいて、口先や尾の先端は原型を留めていませんでしたが、全長は約1.6m、背ビレがあることが判りました。そして、生きていたときの体色が白か灰色であったことも予測できました。さらに、上あごは短く、その歯はすべて抜け落ちていたのですが、歯の抜けあとの数は約6本でした。一方下あごは、残念ながら骨も残っていませんでした。

これらの特徴、そしてこれまでに能登半島近海で見つかったり、漂着したことのある小型ハクジ

ラ類の種類を思い浮かべたところ、「これはハナゴンドウの幼体ではないか!？」と推定することができました。本種は、平成12年8月には当センターの磯の観察路に腐乱個体が漂着し(本誌第14号)、平成13年11月には全長約2.8mのメスが珠洲市三崎町に漂着しています。この小型ハクジラが、ハナゴンドウなのかどうか、採集した頭の骨や筋肉を頼りに、しっかりと調べる必要があると考えています。

もしかしたら、ハナゴンドウが日本海で産卵している証拠になるかもしれません。(普及課長)



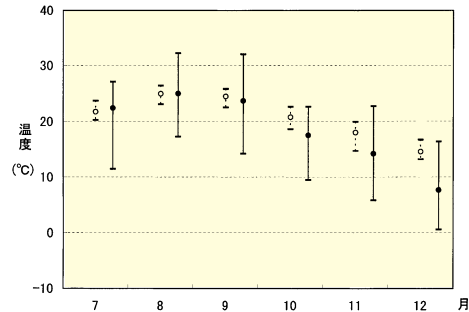
- 2003(H15)年 後期(7~12月)
- 7/ 8 富山県立砺波高校理数科42名が臨海実習を実施
 - 7/ 12 スノーケリング研究会「海もぐら」の総会が開催される
 - 7/ 12-13 のとスノーケリング指導者研修会を開催 受講者17名、救急救命法の講義と実施を奥能登広域圏事務組合内浦分署に依頼
 - 7/ 19 磯の自然観察会「夏の磯観察会」を開催 39名参加
 - 7/ 21 いしかわ自然学校主催「インストラクタースクールのインストラクター養成課程」が開催される 受講者20名 講師：金沢大学理学部教授 矢島 孝昭氏、普及課長 坂井 恵一
 - 7/ 25 スノーケリング教室を開催 受講者23名(コースホステル協会)
 - 7/ 26 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：4名、午後：15名
 - 7/ 27 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：10名、午後：6名
 - 8/ 1 県立小松高校理数科の38名が臨海実習を実施
 - 8/ 2 (財)ボーイスカウト日本連盟主催の第9回日本アグーナリー「石川の夕べ」が珠洲市で開催され、参加者と指導者168名が来館 磯観察と貝殻細工等の体験学習を実施
 - スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：3名、午後：11名
 - 8/ 3 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：16名、午後：7名
 - 8/ 4 金沢大学理学部の臨海実習講師として、田島 迪生館長を派遣
 - 8/ 6-7 県立伏見高校が九十九湾園地で臨海実習を実施、またスノーケリング教室に生徒31名が参加
 - 8/ 8 内浦町主催「スノーケリング教室(宝くじ助成事業)」に協力 参加者20名
 - 8/ 9 台風接近のためスノーケリングスクールを中止
 - 8/ 10 スノーケリングスクールを開催 午前：15名、午後：12名
 - 8/ 8 内浦町主催のスノーケリング教室(宝くじ助成事業)に協力 参加者31名
 - 8/ 16 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：15名、午後：9名
 - 8/ 17 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：14名
 - 8/ 19 県立能登少年自然の家主催「いしかわ子供自然学校」サマーチャレンジ - とびだせ学校イルカになろうよ - の参加者113名が来館
 - 金沢大学理学部の学生9名が臨海実習のため施設見学
 - 8/ 23 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：7名、午後：10名

- 8/ 24 スノーケリングスクールを開催 参加者 午前：6名、午後：3名
- 8/ 29-30 (財)内浦町ふるさと振興公社主催のいしかわ自然学校「九十九湾エコロジーキャンプ」に講師派遣で協力、参加者10名
- 9/ 6-7 スノーケリング指導者講習会を開催 25名参加、内容は7月12-13日と同様
- 9/ 6 県教育委員会生涯学習課主催「土曜ふるさと発見子どもツアー」の参加児童46、引率4名に磯観察を指導
- 9/ 10 全国グリーン・ツーリズム研究大会の内浦町コース参加者41名がスノーケリング(12名)、塩造り(29名)を体験
- 9/ 13 県教育委員会生涯学習課主催「土曜ふるさと発見子どもツアー」の参加児童46、引率4名に磯観察を指導
- 9/ 17 沖縄エコツーリズム推進事業視察のため同県観光リゾート局観光振興課長ほか3名が来館
- 9/ 20 県教育委員会生涯学習課主催「土曜ふるさと発見子どもツアー」の参加児童33、引率4名に磯観察を指導
- 9/ 27 金沢子ども財団主催「わくわく実験教室」の参加中学生5名、引率2名に磯観察を指導
- 9/ 30 のと海洋ふれあいセンターだより「能登の海中林」第19号発行
- 10/ 11 石川県地域づくり推進協議会主催「地域づくりふらいと - 地域づくりシンポジウムいしかわ2003」の進行役・ゲストとして東出 幸真普及課技師を派遣
- 10/ 16 第45回 石川県公立小中学校教育事務研究会 珠洲大会の講演会講師として、坂井 恵一普及課長を派遣
- 10/ 18 磯の自然観察会「秋の磯観察会」を開催 24名参加
- 「石川植物の会」の観察会が九十九湾周辺で開催され、参加者21名が来館
- 10/ 21 珠洲市立宝立小学校における道徳教育研究発表会の講師として、坂井 恵一普及課長を派遣
- 10/ 23 穴水町立向洋中学の総合学習「環境教育」の研究発表会に坂井 恵一普及課長を派遣
- 11/ 14 能登高等技術学校教養講座の講師として田島 迪生館長を派遣
- 12/ 10 内浦町立小木中学校1年生3名が総合学習「職場調べ」のため来館

観 察 路 だ よ り

去年の夏は梅雨明けがはっきりしないままのスタートでした。7月下旬から8月の毎週土・日の午前と午後、10日間で延べ20回のスノーケリングスクールを開催する予定でしたが、8月9日は台風の影響で中止となりました。それでも18回のスクールで合計163人の参加者がありました。また、例年だと毎日のように水温が25 を超えるのですが、今年は25 以下の日がほとんどでした。ウエットスーツを着用していても、水の冷たさと雨にたたられ、寒い思いをした参加者も多かったようです。自然の力には逆らえない事を痛感しました。さらに、光をあびると蛍光色にかがやくワツナギソウの生育も悪く、ソラスズメダイも少なかったのもちょっと残念でした。一方、近年日本海で大発生し、漁業に大きな影響を与えているエチゼンクラゲが内浦沖にも出現し、かさの直径が60cm ~ 1mもあるものが磯の観察路にも漂着しました。

海の自然体験フィールド整備が最終段階をむかえています。現在、海の自然体験館(仮称)とスノーケリングフィールドの整備が行なわれています。今年の夏は、来館される方はもちろん、スノーケリングの参加者にも、これまで以上のサービスが提供できるものと考えています。(K.T)



2003年7月から12月の気温と水温の月別変化
 気温：午前9時に観測した月別平均値()
 実線は月別の最高・最低気温の範囲を示す
 水温：午前9時に観測した月別平均値()
 破線は月別の最高・最低水温の範囲を示す

のと海洋ふれあいセンターだより 「能登の海中林」
 通巻第20号 平成16年3月25日 発行
 編集発行 のと海洋ふれあいセンター
 住所 石川県珠洲郡内浦町字越坂3-47
 TEL 0768(74)1919(代) FAX 0768(74)1920
 URL: <http://www.pref.ishikawa.jp/nmc/index.html>
 E-mail: nmci@pref.ishikawa.jp

— のと海洋ふれあいセンター —

設置者：石川県(環境安全部自然保護課) 管理運営：石川県県民ふれあい公社
 入場料：個人は高校生以上200円、団体(20名以上)160円、中学生以下は無料
 開館時間：午前9時～午後5時(但し、入館は午後4時30分まで)
 休館日：毎週月曜日(国民の祝日を除く)と年末年始(12月29日～1月3日)